

勿凝学問405

中村秀一さんの瑞宝中綬受賞をお祝いする会での挨拶

社会保障制度改革制度会議時の迷シーン?もどうぞ

2019年12月31日

慶應義塾大学 商学部

教授 権丈善一

ここ数年、年の瀬に一つ二つ勿凝学問を書き置いているようで——今年も大晦日になりました。

本年、2019年2月19日に、中村秀一さんの瑞宝中綬章受賞をお祝いする会がホテルニューオータニ 芙蓉の間で開催されました。僕は、挨拶を頼まれ、その文章が手元にあるので、ここで紹介しておこうと思う。勿凝学問史上初の縦書きで。

司会

ただ今より、中村秀一 国際医療福祉大学大学院副院長、医療介護福祉政策研究フォーラム理事長の瑞宝中綬章受賞をお祝いする会を開会させていただきます。本日は、皆様大変ご多忙の中、ご臨席賜り、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めさせていただきます、厚生労働省年金局 国際年金課で課長補佐をしております小林真紀と申します。内閣官房社会保障改革担当室で中村室長の下で働きました。不慣れではありますが、本日はどうぞ宜しくお願いします。

宴もたけなわではございますが、ここで、本日ご列席の皆様よりご祝辞をいただきます。まずは、権丈善一慶應義塾大学 商学部教授、よろしく願いいたします。

権丈先生は、年金、医療、介護などに関する多くの著書を書かれ、わが国の社会保障政策の方向性を示される方であられます。

中村さんは内閣官房で社会保障制度改革 国民会議の事務局長を務めましたが、権丈先生はその国民会議の委員であり、報告書の起草委員もお引き受けいただき、大変お世話になった方です。

権丈様、よろしく願います

権丈

この度は瑞宝中綬章のご叙勲、誠におめでとうございます。

中村さんの話は、厚生省の若い人たち、今は、みんな課長になっていますけど、彼らが、

入省当時、どんなにおつかない上司がいたかというエピソードを、愛情たっぷり、時にものまねもしながら語る宮本課長、竹林課長や伊澤課長たちから、聞いていました。

私が知り合うのは、中村さんが、与謝野大臣の下で、社会保障・税一体改革を進めようとし始めていた2011年2月4日でした。お昼に香取さんから、明日メンバーを公表するからよろしくとの連絡がきて、夜は、アメニティブォラムの場で、社会保障改革室長の中村さんと、当時の日医の原中会長と、野沢さん、当時の滋賀県知事嘉田さんたちと一緒に食事をしまして、中村さんは、部下から私の文章を大量に渡されていたようで、私の言う、トンデモ年金論を言っているのに社会的に太っていくのを焼け太りにかけて、「負け太り」と呼んだりしているのは面白いですねなどとの会話を楽しんでおりました。その日は、最後に、中村さんに、この件、お断りいたしますと、今思えば、大変失礼なことをいたしました、申し訳ありません。あの後も、2度ほど電話を頂いて、お断りしていて、なかなか一緒に仕事をするにはいたりませんでした。

中村さんのお人柄に触れることができたのは、いよいよ一体改革もクライマックスを迎えようとする2013年の社会保障制度改革国民会議の時でした。会議も佳境に入り、報告書をまとめる段階になると、報告書の起草委員会というのが開かれます。その場で、わたくしと中村さんがこつちに座って、わたくしが、提供体制の改革は診療報酬ではできないという文章を書こうとすると、起草委員会は大紛糾いたしました、委員の一人は、そんなことはない、中医協はしっかりと仕事をやっている……と、延々と話をされていたとき、隣で、いきなり、ドンつと机をたたく音がして、何も先生を責めているわけではない、診療報酬では、これまで提供体制の改革はできなかったという事実を論じているだけですつと、いや、もう怒鳴りつけられています。

若い人たちが言っていた机をドンつと叩くつてのはこういうことかあとわたくしは、あの時、とても感動した覚えがあります。

その後、中村さんは、わたくしを同じ方向を向いている仲間と思ったださるようになったのか、一昨年に『ドキュメント社会保障改革』を出された時には、わたくしに帯の文章の依頼がありました。中村さんの前著『社会保障制度改革が目指しているもの』の帯は、与謝野さんが書かれていたので、わたくしは大変名譽な仕事と思い引き受けさせていただき、帯には「これ以上に貴重なドキュメントは今後絶対に生まれない」と書かせていただきました。私は公には、年金部会で話した、「適用拡大は絶対正義」と、この帯の中の「絶対に生まれない」の2回しか「絶対」を使ったことがありません。と申しますのも、中村さんは、53歳の医療保険・医政担当審議官の時から70歳になる17年間、『年金時代』という月刊誌に、匿名で一回も休まずにコラムを書かれていて、それを本にされたものだったんですね。17年間、匿名で自由奔放なコラムを書き続けるという形で歴史の記録を

残し続けられる官僚は、今後絶対に出てこないです。そして、『年金時代』が休刊をするこ
とになった2017年3月に「最終回のコラムで執筆者名を明らかにした」と書かれてい
て、私はそのとき初めて「談論風発」は中村さんひとりが書いてこられたことを知りまし
た。あの頃、植松さんや大島さんに、中村さんがずっと匿名でコラムを書いていたこと知
ってた？と聞いても、誰もしらなかつたようでした。カッコいいですよ。

その後、本の書評も頼まれました、わたくしは、その書評に、中村さんが書かれた、「菅
内閣で一体改革がまとまったのは、与謝野大臣の功績が大であった」という文章を紹介し
ました。その書評が出たとき、中村さんからお礼の連絡があり、「与謝野大臣にすこし恩返
しができたように思います」とありました。

▼ BOOK REVIEW 中村秀一さんの「2001-2017 ドキュメント社会保障改革」『社会保
険旬報』2018年1月1日号

実はですね。そうした、中村さんと与謝野さんの関係を意識した文章を書いたことがあ
るんです。それは、私が昨年末に書いた『中央公論』の文章で、そこに「政治家の影響
は、その政治家がその地位から離れると、うつろう……。現実には、その政治家がどれ
ど部下達から慕われていたか、どれほど人望があつたかに強く依存するようで」と書い
ています。ここはお二人の話を書き、この文章に続いて、「しばしば政治家の影響力は、早
晩、意識的に忘れ去られていく」と書いておりまして、そこは別の政治家をイメージし
ております、はい。

▼ 喫緊の課題「医療介護の一体改革」とはー忍びよる「ポピュリズム医療政策」を見分
ける『中央公論』2019年1月号

私は、中村さんと社会保障制度改革国民会議で一緒に仕事ができたととても感謝し
ております。そしてあの報告書の中に、「提供体制の改革のためには診療報酬とは別の手法
が不可欠」という文章があるのは、中村さんのおかげだったということをみなさんに告白
すると共に、次の言葉は、中村さんの『ドキュメント社会保障改革』の中の文章のマネ
ですけど、「一体改革の下での社会保障制度改革国民会議の報告書がまとまったのは、社会
保障の強化と財政健全化の同時達成にしか未来はないとする中村社会保障改革室長の功績
が大であった」と申し上げて、この祝辞を終えたいと思います。本日は、誠にお目でと
うございます。

追記 机ドンッで思い出しましたが、あの会議は、いろんなことがありました。次など
は、やはり記録と記憶に留められるべきはなしかと思う。

▼ 「インタビュー 国民会議報告は医療界の“ラストチャンス”」『キャリアブレイン』

2013年9月4日より

国民会議の見どころ、7月12日には“事件”も

今回の国民会議では、インターネットで中継される場に関係団体が出て来て意見を述べたことも重要な意味があったと思う。(2013年)3月27日には、病院団体をはじめとした医療団体が参加し、強い改革意欲を持っていることが示された。これは、医療界がやる気がないから改革が進まないのではなく、医療提供のシステムがうまくいっていないから膠着しているということの表れでもある。

国民会議が報告書を提出した後、日医と四病院団体協議会は、医療提供体制についての合同提言を出していた。西澤寛俊・全日本病院協会長は合同提言発表の記者会見で、「提供側が2025年に向けた改革をしていく、われわれが中心にやっていくんだという覚悟ととらえていただければ」と述べていたが、この動きには期待したい。

対照的なのは、日本経団連などの経済団体が参加した2月19日の回。負担の抑制、医療の効率化、医療費の抑制と繰り返した一方で、大島伸一委員からの「そもそも皆さんはどんな医療を保険で受けたいとお考えか。これについてどのような議論が行われているのか聞きたい」という質問には、「そんなことは考えたこともなく議論もしたことがない」と答えていた。この日は経済界が、医療政策に関する基礎的なデータ、基本的な情報さえ把握していないことも示された(1)。

3月27日の医療界、2月19日の経済界、この2回のヒアリングを見比べると、非常に示唆に富むものがある。

興味深いことが起こったのは7月12日の回。2人の委員が同じ内容を、同じ言い回しで発言する“事件”が起きた。それを動画で見ていた何人かの記者たちからは、会議の後に、あの時のおかしな雰囲気について連絡がきた。

どうしてああいうことが起こったのかは想像に任せるが、あの日に質問を読み上げていたうちの1人は、その同じ日に「委員」人ひとりの発言、意見というのは専門性に裏付けがあって、なおかつ責任が伴うものだ」と発言していて、パロディを超えるおもしろさがあった。動画を見て、楽しんでおいてもらいたい。